

古い方言と新しい方言の問題〔付注版〕（付記）

安 部 清 哉

キーワード＝古い方言、新しい方言、西日本層、古代全国層、
伝播圏の相違、カワズの言語地図

はじめに

【方言の全国規模での分布を、一語形ごとに文献資料と対照させながら、分布の地域とその時代との関係を見ていくと、そこにいくつかの特徴が認められ興味深いものがある。分布する範囲・地域が非常に類似するもの（安部一九八九）、さらに、その時代が比較的近い時期のものなどがあり、そこにはいくつかのパターンが指摘できるようである。

上代語のコマ（牡馬）・アキヅ（蜻蛉）・シマキ（旋風）などが、
東北部・中部・南西部といった三周辺地域分布（三辺境分布）をなすのもその一つであり、また、中世以降の西日本語形が、西日本の

比較的内側（例えば、中国・四国の東部と近畿西部といったように）に分布を形成するのも、歴史的時間が比較的短いため周辺部にまだ広がりがきいていないということがあるとはいえ、その一つであり、また、近世以降の江戸語が関東とその近隣に分布するのも、その一つである。「中距離遠隔分布」（山口幸洋一九九二）もそのようなものの一つと位置付けられよう。

そのような、分布と時代の傾向がある程度明らかになれば、分布からその時代をある程度推定するという道も開けてこよう。

ここでは、上代・中古・中世の主に古代語の分布を、東西日本に互って全国規模で分布する場合、東日本にのみ分布する場合、西日本にのみ分布する場合、という視点から把握し、古代における方言の新旧と地域差について、一つの問題提起を試みたい。

なお、方言資料は、国立国語研究所『日本言語地図』（L A J）

を中心に見ていくことにする。その中から語彙に関する問題に限定し、子供の遊びの名や小動植物名のような小地域毎の変化の多いものは除いて考えていきたい。】

一 分布範囲の相違から見た

「古い方言」と「新しい方言」の問題

【方言分布と時代の傾向の中で、古代の語が、多く東西の極めて周辺部に分布すると言われながら、その一方で西日本のみに分布が限定されてしまっている場合も少なくないことに気付く。同じ古代語でありながら、分布範囲が異なるということは、文献ではもはやそれ以上溯れないながらも、何らかの時代差か、歴史的背景の相違がそこに投影していることの現れではないか、という仮説が立てられよう。】

また、これまで、中央（京畿）の語が、古くは（あるいは、ある時期）西に伝わりやすく、東、特に東西境界線以东へは伝わりにくかったらしいことが、指摘されてきている（例えば、橋正一一九三六、藤原与一一九六二 徳川宗賢一九七二）。これらの指摘におけるその傾向は、いつ頃のことを指し、また、どの程度のものであるのかについては必ずしも明らかではない。近世前期には、上方語の江戸への伝播も少なからず確認されるようになるから（安部一九九

三a）、おそらくは特にその前後以前の古い時代を問題とするものと推察される。一方、上代あるいはそれ以前と推定される古い語形では、西日本に偏ることなく東西日本の周辺部に周囲分布しているものが指摘されてきているから、やはり、いつ頃の時代に見られるどの程度の「傾向」であるのかが問題として残る。

ここではそのような指摘を踏まえ、およそ中世を含むそれ以前の時代における方言分布を、「古い方言」と「新しい方言」という対比からとらえ、かつ、東西日本に互って分布するか、東西にいづれかに限定されるかという観点から、この指摘のもつ意味を考えてみたいと思う。

二 上代あるいはそれ以前の語形で

東西日本に互って周囲分布するもの

文献資料から考えて、上代あるいはそれ以前からと考えられる語形で、方言分布の上では、東西日本に互って周囲の分布をしているものがある。まずそれらを見てみたい。

(1) ア（畦）（LAJ187図「畦畔」）

田の境をいう古語にアがある。『古事記』に「天照大御神の営田の阿アを離ち、其の薄を埋め」とあり、そのほか、平安時代の古辞書や訓点資料にも見られる。LAJでは、単独語形としてのアは見ら

れないが、それとの複合語形として、アグロ（ア＋クロ（畦））が北海道松前に、また、アブシ（ア＋フシ（節、或は縁））が南西諸島全域に見られる。複合語形に留められたかたちで、アが日本列島の東西に周囲分布しているのが確認される。文献と分布とから、上代以前の古い語形であると考えられる（L A J 解説・『方言の読本』・安部一九九四）。

(2) シマキ（L A J 264 図「旋風」）

つむじ風（旋風）を表す方言にシマキがある。L A J では、青森・宮崎という南北端のほか、三陸・紀伊半島・三重・北九州などの沿岸部など、東西に周囲分布し古い語形であると推定される。シマキは、シ（風）＋巻キで、「風が渦を巻いたもの」を表した語形と考えられる。文献では、『源順集』など中古以降のものしか見られないが、風を表すシの例は、上代では、①風（荒＋シ）、②「風な処（風の吹き起る所）」（祝詞）、③「志那都比古神（風神名）」（記神代）など、複合語での例しか見られず、既に古語化していたものと考えられるから、シマキもその成立は、古語化以前、つまり、文献時代以前と考えられる（安部一九八八・『方言の読本』）。

(3) ホデリ（稲妻）（L A J 258 図「稲妻」）

稲妻を表す方言に、ホデリ・ホテル・フディーなどがある。ホデリ・ホテルは「火＋照リ・ル」と考えられるが、L A J では、三

陸・宮崎にホデリ、紀伊半島・高知にホテル、瀬戸内にホデル、鹿児島甑列島にホッテンなどが点在し、南西諸島には、その変化形と考えられる（奥村一九九〇）フディー・フドゥイなどが分布する。

三陸の分布は沿岸部のみである点で問題であるが、それが古語の残存であるとすれば、全国的周囲分布をなすことになる。文献では稲妻そのものの例は確認できないが、「夕焼けで赤くなること。」（『新撰六帖』）、「大風の吹こうとするとき、沖の方の海面が赤く光ること。」（『書言字考節用集』）、動詞ホテルでは、「山上または海上が、夜光る。」（『夏山雑談』）（以上『日本国語大辞典』、以下『日国大』）の例があり、方

言にも「火事などの時に夜空に映ずる火明かり。（岩手県上閉伊郡）」（『日本方言大辞典』）という例があるように、空などが赤く・明るく輝くような自然の発光現象を広く表した語のようで、そのように解釈するのが「火＋照リ」の語源とも合う。これまでホデリの上代の例は指摘されていないが、右のように解釈されるなら、『古事記』に見られる神名「火照命」は、上代の例として考慮される。

「火照命」は、母の木花之佐久夜毘売が、その子が皇孫の子であることを証明するため室に火を放ち、その燃え盛る中で産んだ三神の一人であり、単人の始祖とされる神である。燃え盛る火の中から産まれた神であるがゆえに、発光現象を表すホデリが使われたものと考えられよう。稲妻を表すのも、自然の発光現象の一つとして方言

に残ったもので、「火照命」はホデリの文献例と解釈できる（安部一九九四）。『古事記』は神名、『新撰六帖』は和歌、ほか右の二例は辞書などでの語釈の例であるから、早い段階で中央では古語的に残り、方言などに残ったものであろう。

このほか、同様の事例に、アモ（母）・スガリ（蜂・蟻）（加藤正信一九八七）、コマ（馬）、ナヰ（地震・大地）、アキヅ（蜻蛉）などがある。これらも上代あるいは文献以前からの古い語形であることが推定されている。

以上のような古い語では、東日本、西日本の一方のみに偏ることなく全国的規模で分布しているものがあることがわかる。

三 中世前後の語形で、西日本に偏って分布するもの

次に、少し時代を下って中世前後の文献に用例が見られる語形のうち、まず西日本に分布が偏る語形を見てみたい。

(1) アマル（雷が）落ちる）（L A J 95 図「雷が」落ちる）

雷が落ちることをいう表現にアマルがある。その分布は、九州は大分、四国はほぼ全域、広島東部から岡山・兵庫西部にかけてと出雲・隠岐の一带、近畿の空白地帯を挟んで西日本の東側境界にあたる愛知に見られ、西日本の中心地京阪から見てその東西両側に周囲

分布をなしている。文献では、『御湯殿上日記』に長享三年六月「大夕だちして神おどろおどろしうなる。あまるよしきこゆる。」などであるのが知られている（『日国大』）。この中世後半に文献に確認できるアマルは、西では大分まで伝播が及びながら、糸魚川・浜名湖の東西境界線より東には分布が及んでいない。

(2) イカノボリ（L A J 143 図「風」）

風をいうイカノボリという語形がある。分布は、北陸・近畿・中部地方東部・四国北東部、九州では大分などに見られ、新潟にも分布が見られるが、それ以外の東日本には分布がない。新潟のものは、西日本からの海路での分布と考えられるから、西日本に分布が偏り、陸路では東西境界線を越えていないことがわかる。文献では、一六二〇年の『破提字子』以降から例が確認され（『日国大』）、上方語として使われてきている。

(3) ホウル（捨てる）（L A J 62 図「捨てる」）

捨てることを表すホウルという語形がある。分布は西日本に偏り、北陸・中部・近畿・四国と福岡にはほぼ限定されている。東日本では二地点（神奈川県、銚子付近）見られるが、西日本語形が一部伝ったもので基本的には東日本には広がらなかったものと見なせよう。文献では、中世後半の『広本（文明本）節用集』に見られる。これも、福岡まで伝播が及びながら東西境界線より西側にしかまとまった分

布を形成していない。

同様に、西日本に偏った分布を示すものに、禿頭を表すキンカ（中世末以降、L A J 103 図、安部一九八七）、庭の意味で使われるゼンザイ（前栽）（中世前期以降、L A J 193 図、安部一九八八）、塩味が薄いことを表すミズクサイ（中世前期以降、L A J 38 図）などがある。これらのように、この頃の京畿からの語の伝播は（北陸・東北の日本海沿岸への伝播は海路によるものであるので別に考えれば）、陸路では東西境界線を越えて東日本まで及ぶことが極めて少なく、西日本の範囲内に偏る顕著な傾向が認められる。

四 中世末までの語形で、東日本に偏って分布するもの

中世前後、さらにそれ以前のものを含めても、東日本のみ分布することが明らかな語形は、西日本の場合に比べてかなり少なくなる。まず、その候補として、上代文献に例がある語形で挙げれば、崖・土手状の傾斜地形を表すママ、谷状の地・湿地を表すヤチ・ヤツ・ヤト、夫・恋人（男）・男の兄弟を表すセナ、動詞命令形における口（起き口）、打消しの助動詞ナフ（現代語のナイの前身ともされる）が挙げられる。いま詳しくは紙幅の関係で省略するが、特にナフを除いて、これらは西日本に検討の必要な方言の分布があり、確実に東日本に限定された語形であったかはどうかは現段階では必

ずしも明らかではない（安部一九九四参照）。【笹原宏之一九九四】東日本のみ分布が限定されているのが明らかな古い語形としては、十六世紀後半に例が確認できるカンダチが挙げられる（迫野虔徳一九八二、安部一九九三a）。少なくとも中世後半以降の語形においては、先の西日本の事例同様、東日本に分布が限定されているものがあることが確認される。

このほか、この前後に文献に確認され、しかも、東日本に分布が限定される語形としては、オツカナイ・シヨッパイ・カ Ril など が考慮される。しかし、オツカナイはオホケナシが変化した語形である可能性が高く（安部一九九三b）、シヨッパイは一般にシハハユシ（あるいはシホハユシ）が変化したものとされ、カ Ril も四段活用のカ Ril が変化したもの（迫野虔徳一九七二）と考えられている。これらは、東日本（および西日本周辺部）の方言において母音よりも子音が優勢である（榜垣実一九六一、金田一春彦一九六七、平山輝男一九六八、上村幸雄一九八六、藤原与一¹⁾一九九〇）という「子音性優位方言」（馬瀬良雄一九七七²⁾であるため、東日本でその「音的フィルター」（真田信治一九八七・一九九二）による言わば「ダッシュ付け」（藤原与一¹⁾一九六二）を受け、もとの語形が「焼直し」（小林隆一九九一）されて生まれた「子音性優位語形」（安部一九九三b）であると考えられるものであり、その元となる語形はい

ずれも西日本にも分布する語形であることがわかる。

文献では、カル(四段)は上代、オホケナシ・シハハユシは、中古前半に見られるが、いつ東日本に伝播したものであるかは、東日本における文献上の制約もあり明らかでない。いずれにしても、三で見たとように明らかに西日本に偏る分布が多いのに比べて、東日本にのみ分布することが明らかな語形は、中世末までかなり少ないことが指摘できる。

いま挙げてきたのは一部の語形に留まるが、上代から中世の期間において、西日本の場合と比較して、東日本に偏る古い語形は少ない。

おそらくは、これらのようなことが、先述のような、ある時期における京畿からの語の伝播の西日本への偏りに関する指摘となつてゐるものと思われる。

五 上代(以前)・中古の語形で、東西に互つて

周囲分布するものと、西日本に偏るものとの比較

三・四で見たとように、中世までの語で東日本に偏る確実なものはないが、少なくとも中世前後の語には、東西いずれかに分布が偏るものがあることが認められる。特に西日本に多く偏るその傾向は、以下のように、遡って中世以前、更に上代以前と考えられるものに

も認めることができる。二で見た事例のほか、実は上代には分布が西日本に偏るものも認められるのである。

二のような東西に及ぶ古い語形を別として、京畿からの語の伝播が東日本に及ぶようになる事例、反対に、関東などからの語の伝播が西日本に及ぶようになる事例の確かなものは、東国文献などによつて中世後半頃から確認されるようになり、近世以降少しずつ増えていく。そのことから考えて、先に挙げた、中央(京畿)の語が東西境界線以东へは伝わりにくかつたらしいという指摘は、具体的に、特に上代(以前)から中世後半頃までにおける、以上のような西日本への偏りの多さによる傾向をいうものと考えられる。

一方、二で見たとように、古くは東西に互る分布も見られ、また、三のように古く東日本のみ偏るのが確かな分布が少なく西日本に偏る分布が多いわけであるから、上代(以前)・中古・中世において、西日本にのみ分布する場合と、特に上代(以前)において東西日本に互る場合という大きな二つの傾向があるのはどのような理由によるのかということが問題になる。

そのことを考えるためには、まずその二つの間にどのような相違があるかを見てみる必要がある。ここでは、上代(それ以前)・中古の語形で、西日本分布するものと、東西日本に互つて分布するものとを比較し、そこに見られる相違についてその一端を見てみた

いと思う。

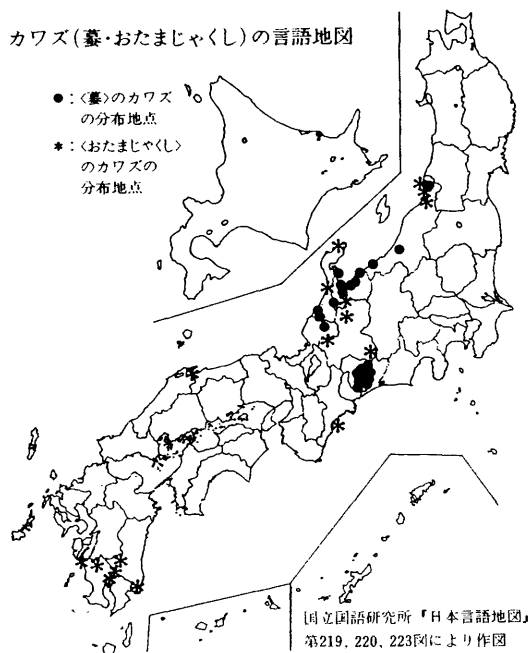
(一) ツジ——シマキ・マキカゼ (L A J 264 図「旋風」)

ツジは西日本に偏り、一方古い語形シマキ(風巻)、シをカゼに変えたその後統語形マキカゼ(巻風)は東西に亙って周囲分布する。西日本語形であるツジは、古語ツムジが、少なくとも八〇〇年代半ばから九〇〇年代半ば頃までの間に、二音節目の母音を落としてツン(m)ジ↓「ツン(n)ジ」↓ツジへと変化したものである。ツジの前身語形ツムジは、一旦文献から姿を消し、近世後半になって再び現れるようになる。方言の北東北の分布は、古く東西に分布した残存か、接続助詞サカイ等と同様、日本海海路による西日本からの伝播かという両面が考えられるが、関東の分布は、旋毛をいうツムジ(小林一九八七)同様、近世になって上方から江戸に伝わり再盛したものと考えられる。ツムジから派生したツジカゼは、文献に多く登場し、特に辞書に記載され、文章語的規範語的性格が認められるが、それに比して、マキカゼは広範囲の分布をもつにもかかわらず文献・辞書にはほとんど現われず、シマキと共に口頭語的非規範語的性格が強い語形と考えられる(安部一九八八)。

(2) ヨム——カゾヘル (L A J 69 図「数える」)

「数える」ことを表す語形として古くはヨムも使われ、文献では特に上代・中古に見られる。カゾヘルは東西に亙って分布するが、

カワズ(藁・おたまじゃくし)の言語地図



ヨムは西日本に偏る(因に、中古以降に確認されるカズヘルも分布は西日本に偏る)。カゾヘルは「指(および)折り」「手を折りて」(『万葉集』)など指を折って数える行為と共に表現された例があるのに、ヨムにはそのようなものはない。ヨムは「暦(日読みの意)」と関わり、文章を「読む」こと、和歌を「詠む」ことをも表す。指を使うような原初的な数え方のカゾヘルは「数える」行為を表す古い語形と考えられるが、ヨムはそれとは異なり、文化的性格を

もった新しい語であることがうかがわれる(安部一九九〇・『方言の読本』)。

(3) カワヅ——ヒキ(LAJ)²¹⁸〜223図「蛙」「蟪」「お玉杓子」

「蛙」「蟪」を表すヒキ・ビッキは東西日本に互って分布する。

このヒキは、文献では中古以降に見られ、既に「蟪」の意味に限定されているが、分布から見て、古くは「蛙」「蟪」を区別せず、語形カヘル以前の蛙の総称として使われていたと考えられる(LAJ『解説』)。カワ(ハ)ズは北陸・中部・東海などに比較的まとまって分布するほか、全国に点在する。『解説』は、併用地点の注記から、新潟では「古い」とするのに対して、長野では「標準語的・新しい」とするという反対の傾向があることを指摘する。その点に関わって注意されるのが、カワズの分布の東西差である。

カワズは、西日本の範囲として扱われる新潟を含む北陸・岐阜・愛知及び、その分布に連続する長野南西部・神奈川西部の分布を東側の境界としてそれ以西の分布の方が多く、西日本に偏る傾向が指摘できる。東北の分布は殆どなく、LAJ『注記一覽』によって、関東一都六県の九地点のうちの二地点(併用回答)も共通語などの注記があり新しいものであることがわかる。つまり、西日本に比べて東日本のカワズはかなり少なく、しかも、ややまとまって見られ

る長野の傾向から見ても、これらが新しい分布である蓋然性が高いと考えられる。そのことから、カワズは古くは東日本には分布を持たず西日本語形であったことが推定されるのであるが、そのことを裏付けるものとして、「お玉杓子」「蟪」の分布に見られるカワズ類を含む語形の分布が挙げられる(カワズの言語地図 参照)。

「蟪」に見られるカワズは、蛙の意味のカワズが長い年月の間に、その周辺の意味へと「浸み出し」たものであると解釈できるし、「お玉杓子」にみられるカワズノコも、カワズが長い歴史をもつ地域で自ら生まれ得る語形であろう。新しく伝わった地域ではこれらの意味では容易に使われなかったことが考えられる。「蟪」「お玉杓子」におけるカワズ類の分布を見ると、新潟を含む西日本の北陸・中部・東海・出雲・南九州に限られ、東西境界線以東には長野にすら見られないことがわかる。このことから、『解説』が指摘する新潟と長野との傾向の相違の意味はより鮮明になる。カワズがかつて西日本語形であった蓋然性はかなり高いと考えられる。

西日本語形カワズは、文献では上代において既に歌語として特別の地位を与えられている。一方、古く総称であったであろう東西に分布するヒキは、ついに新しい総称カヘルにも負けて醜悪な「蟪」の名前にてようやく生き残ることとなった、とも言えようか。

カハヅーカヘル、タヅーツル(鶴)に語形上の対応が見られるが、

総称として東西に分布するヒキが古く、カヘルが新しいものであるなら、西日本語形カハヅはヒキより新しいものであることが考慮される。

(1)(2)(3)では、少ない事例ながら、古代あるいはそれ以前において、東西に互って分布する語形に比べて、西日本にのみ分布する語形の方が、規範語的・文章語的、文化的、あるいは、文体的に高い性格(歌語)をもつ傾向が指摘できる。

六 おわりに

京畿からの語の伝播が、ある時期西日本に偏りやすい傾向が認められるという指摘に導かれつつ、語彙上の事例を、東日本・西日本・全国という大きな単位で見ながら、古い時代の分布傾向と、それよりもやや新しい時代の分布傾向とを比較してみた。総合的には、おおよそながら次のようなひとつの「傾向」が指摘されるかと思われる。

- (1) 上代、あるいはそれ以前からの古い語形の中には、東西日本に互って分布するものが認められるのに対して、中古・中世における新しい語形では、分布が特に西日本に偏る傾向が認められる。

- (2) 上代(以前)からの語形の中にも、東西日本に互る分布と

特に西日本に偏る分布とが認められるが、それらの中には、古い語形と考えられる方が東西日本に互り、新しい語形と考えられる方が西日本に偏るものがある。⁽³⁾

- (3) 上代(以前)からの語形で、東西日本に互る語形と、上代(以前)・中古からの語形で西日本に偏る語形とを比較すると、前者に対して後者の方に、規範語的性格、文章語的性格、文化的性格が認められるものがあり、西日本に偏る分布の一面として、文体的位相的に高い性格をもつという側面が看守される。

また、これまで、方言の分布で「東日本単純分布—西日本複雑分布」というパターンが、その逆に比べて多いことが指摘されている(佐藤一九八六)。特に中世までに認められる、東日本の場合に比べて西日本に分布が偏る語が多いという上記の傾向が、そのようなパターンを生み出した背景にあることが指摘できよう。それはまた、古く特に東日本一帯に影響を及ぼす文化の中心地があったかどうかということとも関わっている問題と思われる。

紙幅の制約上多くの事例は挙げ得なかったが、総体としても、これらはいまのところ語彙全体から見ればまだ少ない事例によるものでしかない。今後も多く事例に互って検討を重ねていく必要のある問題であろうと考える。

注(1) 金田一一九六七によれば、服部四郎氏の指摘に遡る(2) 教示いた

いた柳田征司氏、秋永一枝氏に感謝申しあげます。

(2) これが、上代以前に古く遡るものであるとみるか(馬瀬一九七七)、またそこに「潜在的下地」(奥村一九九〇)や「言語素地」(今石元久一九九二)の相違という観点を導入するか、近世以降に生じたものであると考えるか(柳田征司一九九三)については、今後の課題であろう。

(3) このことは、蹠を表すキビス(東西分布)と踵を表すキビス(西日本分布)にも認められる(小林隆一九八二)。

補注

1 この問題については、柳田征司氏の下記のご論文がある。「子音性・母音性」に起因するとして指摘される諸特徴が、本質的には何に求められるのかに関してはなお課題であり、いくつかの解釈があることは、安部一九九三bでも既に触れてある。

東西対立が「子音性・母音性」に起因するものではないとする柳田氏においても、アクセントについては、現代の東京式アクセント地域のことばが、音便が定着した頃に、特殊音節が単独でアクセントの山を担えないという性格を既にもっていたことが、京阪式アクセントから東京式アクセントが分離する直接の原因だったのではないか(柳田一九九五)とされ、そして、「東京方言がこの性格を古くからもっていたと推定する」(柳田一九九四)とされた。

「特殊音節が単独でアクセントの山を担える方言と担えない方言」という古くからの東西間の音声的相違がその要因である、という新たな解釈であり(それがどのような理由でいつ頃から生じたかについては、柳田一九九五で別稿に委ねられた)、一方、解釈と名付けは別として、古くからのある種の音声的相違に起因するという意味ではこれまでの説とも重なってくる。

ここでは、東西対立成因の新しい解釈として、安部一九九三bを補足する意味で挙げておくに留めたい。猶、日本語のアクセントの成因の解釈については、重層説をとる桜井茂治(一九九四)もある。

柳田征司(一九九三)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(平成五・

六、武蔵野書院)

同(一九九四)「母音優位・子音優位」(『国語学』一七八、平成

六・九)

同(一九九五)「モーラ方言アクセント(京阪式アクセント)・シ

ラビーム性モーラ方言アクセント(東京式アクセント)・シラ

ビーム方言アクセントの分離は、いつ、どのようにして、なぜ

生じたか」(『愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部 人文・社会科学』

二七―二、平成七・二)

桜井茂治(一九九四)『日本語音韻・アクセント史論』(平成六・二、おう

ふう)

2 ヨム(読む)について、公表後、川本崇雄氏に次のようなご意見を頂戴した。「ヨムについて、『文化的性格をもった新しい語であることがうかがわれる』とおっしゃるのが気になります。一節によれば五〇〇〇B Cとされるオセアニア粗語に**numi*〈数える〉がありますが、この単語は〈読む〉ばかりでなく、〈歌を作る〉の意味も兼ねているからです。」(一九九三・八・一八付け私信)

〈読む〉と〈数える〉の意味上の関連については、鶴久氏の次の指摘もある。「ヨミは『数える』意であることは動かし難い。読むといふ意を有するリトワニア語の *skaiti, nūsa* も数へるといふ意をもっておりと言はれてゐる。」(『古代日本における意味論的考察』『久留米大学文学部紀伊国際文化学』二、一九九三・三)

外国語に限らず日本語においても、ヨムばかりでなく、カゾエルの方も、遅くとも中世には「白拍子をうたうこと。白拍子のように無伴奏で、歌謡を拍子をつけてうたう。」(『日国』)の意味で使われているのはよく

知られており、〈読む〉〈歌う〉〈数える〉の意味的関連は、言語の相違を越えた現象として注目される。

川本氏へのご返答にも書いたことであるが、本稿では、ヨムに〈文字を読む〉〈歌を詠む〉〈暦―日読み―数える〉の意味があることを、ヨムの文化的性格として絶対的に扱ったのではなく、上代におけるヨムとカゾエルの意味的差異(カゾエルの方は、文字にもまだ歌にも関わらず、指を折って数える用例がある)と、地理的分布の差異とから比較して、相対的位置付けとして述べたものであった。説明不足のところと思われるので補足しておきたい。ご指摘いただいた川本氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 安部清哉(一九八七)『全国方言分布の成立過程における四つの層』(『国語学会昭和六二年秋季大会要旨集』(岐阜大学)、昭和六二・一〇)
- 同(一九八八a)『旋風』の変遷における方言分布の四つの層——古代語彙の二系列——(『フェリス女学院大学紀要』二二、昭和六三・三)
- 同(一九八八b)『へ庭』の変遷における方言分布の四つの層』(『文化』五一―三・四、昭和六三・三)
- 【同(一九八九)『日本言語地図』三辺境分布・東西辺境分布Ⅱ語形図集—『フェリス女学院大学紀要』二四、平成一・三】
- 同(一九九〇)『上代における日本語の二つの層(上)——カゾフとヨムの場合——』(『玉藻』二五、平成二・三)
- 同(一九九三a)『語彙における伝播の中心地と伝播の範囲とによる方言分布成立過程の解明の問題』(『フェリス女学院大学文学部紀要』二八、平成三・三)
- 同(一九九三b)『語の“動的運動”と音韻上の“静的作用”とによる方言分布の二重構造の一面』(『国語学会平成五年春季大会要旨集』(京都女子大学)、平成五・五)
- 同(一九九四)『古代語と方言——方言の分布と中央語の地理的広がり——』(古橋信孝・三浦佑之・森朝男編『古代文学講座』七、平成六・一、勉誠社)
- 今石元久(一九九二)『日本語方言によける母音の音響的特徴について——母音の史的発達事情——』(『小林芳規博士退官記念国語学論集』、平成四・三、汲古書院)
- 上村幸雄(一九八六)『日本語方言の概説』(『講座方言学』一、昭和六一・五、国書刊行会)
- 椋垣 実(一九六一)『音韻』(『方言学講座第一巻』、昭和三六・一、東京堂)
- 奥村三雄(一九九〇)『方言国語史』(平成二・九)
- 加藤正信(一九八七)『方言分布から見た日本語の古層』(『言語』一六―一七、昭和六二・六)
- 金田一春彦(一九六七)『東国方言の歴史を考える』(『国語学』六九、昭和四二・六)
- 小林 隆(一九八二)『文献と方言分布からみたへくるぶし(蹠)の語史』(『国語学研究』二二、昭和五七・二)
- 同(一九八七)『古語ツムジの復活——みやこの移動と名称の変遷』(『言語生活』四二、昭和六二・三)
- 同(一九九一)『方言東西対立分布成立パターンについての覚え書き』(『国立国語研究所“研究報告集”』二二、平成三・三)
- 【笹原宏之(一九九四)『地域文字の考察——地名に現れた日本語表記の時代差と地域差の一例——』(『文化女子大学紀要』人文・社会科学部研究二、平成六・一)。(地名に残るママ(屋)の分布がわかる。御教示下さった近藤尚子氏に感謝申し上げます。】
- 迫野虔徳(一九八二)『方言語彙史』(『方言の語彙』、昭和五七・四、明治書院)

佐藤亮一 (一九八六) 『方言の語彙——全国分布の類型とその成因——』

〔講座方言学一 方言概説〕、昭和六一・五、国書刊行会)

同 (一九九一) 『方言の読本』 (平成三・八)

真田信治 (一九八七) 「ことばの変化のダイナミズム——関西圏における

neo-dialect について」(『言語生活』四二九、昭和六二・八)

〔音的フィルター〕

同 (一九九二) 『富山県のことばについて』(『第二二回富山県学校

図書館研究大会集録』、平成四・一一) 『言語のフィルター』

橘 正一 (一九三六) 『方言学概説』(昭和一一・五、育英書院)

徳川宗賢 (一九七二) 「ことばの地理的伝播速度など」(『現代言語学』、昭

和四七・三、三省堂)

平山輝男 (一九六八) 『日本の方言』(昭和四三・九、講談社現代新書)

藤原与一 (一九六二) 『方言学』(昭和三七・六、三省堂)

同 (一九九〇) 『日本語方言分派論』(平成二・二、武蔵野書院)

馬瀬良雄 (一九七七) 「東西両方言の対立」(『岩波講座日本語一 方

言』、昭和五二・一一、岩波書店)

柳田征司 (一九九三) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(平成五・

六、武蔵野書店)

【山口幸洋 (一九九二) 「中距離遠隔分布の方言——形容詞方言における中

部と西国の一致——」(『国語学』一六八、平成四・三)】

〔付記〕

本稿は、『言語』二二一九(一九九三・九)に「古い方言／新しい方言」という題で依頼を受けた際、最初に提出した原稿である。やや枚数が多かったため、紙幅に合わせるべく参考文献を全て割愛し、語句を削って公表した。

先行研究への配慮上、参考文献を付しておきたいとはかねがね思っていたが、その際は該当事例を補足し書き足したいとも考えていた。

今回、『玉藻』の記念号ということで、何か寄稿するよう求められ

たこともあり、また、拙稿は文字どおりの拙いものであるが、近時取り上げられることもでてきたので、参考文献を付す機会として旧稿を寄稿させていただくことにした。加筆する時間的余裕がないのがいささか心残りであるが、提出時のままである方がそれはそれで意味があるうかとも考える。

なお、依頼テーマに合わせてあった冒頭部分のみは書き改め、【】を付して示した。(割愛していた「カワズの言語地図」を付した。)また、公表後いただいたご意見とその後の関連論文について、補注を付した。大方のご了承いただければ幸いです。

(一九九三・六・二五 稿了、一九九五・七・二九 補記)

(本学助教授)